

2 階非包合的多重特性作用素に対する
特異 CAUCHY 問題

東大 理 打越敬祐

$(x, y) \in \mathbb{C} \times \mathbb{C}^n$, $y = (y_1, y') \in \mathbb{C} \times \mathbb{C}^{n-1}$ として, 2 階
の偏微分作用素

$$P = \sum_{z'+k1 \leq 2} x^{k(z', \alpha)} a_{z' \alpha}(x, y) \frac{\partial^{z'}}{\partial x^{z'}} \frac{\partial^\alpha}{\partial y^\alpha}$$

を扱う。但し, $k(z', \alpha)$ は, $0 \leq z' \leq g-2$ を満たす整数
 g, g' によって

$$k(z', \alpha) = \begin{cases} g - k1 & z' + k1 = 2 \\ g' & z' = 0, k1 = 1 \\ 0 & \text{その他} \end{cases}$$

により定められる整数とする。更に, $a_{z' \alpha}$ は原点で正則な函
数とし, $a_{2,0}(x, y) \equiv 1$ とする。このような作用素に対し,
特異 Cauchy 問題

$$(SCP) \begin{cases} P u(x, y) = 0 \\ \frac{\partial^{z_i}}{\partial x^{z_i}} u(0, y) = \dot{u}_i(y) \end{cases} \quad z_i = 0, 1$$

を考察する。但し, $\dot{u}_i(y)$ は十分小さい $R > 0$ に対し

$$\{ y \in \mathbb{C}^n; |y_i| < R, y_i \neq 0 \}$$

で定義された多価正則函数で, ある $C > 0$ に対し

$$|\dot{u}_i(y)| \leq C \exp \{ C |y_i|^{-(g-1-g')/(g+1)} \}$$

を満たしているとする。

ゆえゆえは次の仮定を置く:

仮定 (x, y) の双対変数 (ξ, η) に対し,

$$\begin{aligned} \sigma_2(P)(x, y, \xi, \eta) &= \sum_{z_i + k_i = 2} x^{k_i(z_i, \alpha)} a_{i\alpha}(x, y) \xi^{z_i} \eta^\alpha \\ &= \sum_{z_i + k_i = 2} x^{g k_i} a_{i\alpha}(x, y) \xi^{z_i} \eta^\alpha \\ &= 0 \end{aligned}$$

の根を, $\xi = x^g \lambda_i(x, y, \eta)$, $z_i = 1, 2$, とするとき,

$$\lambda_1 \neq \lambda_2 \quad \text{at } x=0, y=0, \eta=(1, 0, \dots, 0)$$

このとき, (SCP)の解 $u(x, y)$ で, $\{x=y_i=0\}$ を通る2つの特性曲線以外で多価正則なものを構成することができる。

正確に述べるため, 少し準備をおこなう。

$\varphi_i(x, y)$, $i = 1, 2$, を

$$\begin{cases} \frac{\partial}{\partial x} \varphi(x, y) - x^2 \lambda_i(x, y, \nabla_y \varphi_i(x, y)) = 0 \\ \varphi_i(0, y) = y_i \end{cases}$$

の解とする。 $\varphi_i(x, y)$ は原点で正則で、逆函数定理により、

$$\varphi_i(x, y) = 0$$

を y_i について解くことができる。その解を、

$$y_i = \psi_i(x, y')$$

とする。 $\omega_{r, \theta} = \omega_{r, \theta}' \cup \omega_{r, \theta}''$ を、

$$\omega_{r, \theta}' = \{ (x, y) \in \mathbb{C} \times \mathbb{C}^n;$$

$$|x| < r, |y_j| < r, 1 \leq j \leq n,$$

$$|\arg(y_i - \psi_i(x, y')) - \theta| < \frac{\pi}{2} + r,$$

$$i = 1, 2 \}$$

$$\omega_{r, \theta}'' = \{ (x, y) \in \mathbb{C} \times \mathbb{C}^n;$$

$$|x| < r, |y_j| < r, 1 \leq j \leq n,$$

$$|\arg(y_i - \psi_i(x, y')) - \theta - \pi| < \frac{\pi}{2} + r,$$

$$i = 1, 2 \}$$

とする。このとき、次のことがわかる:

定理. $r > 0$ を十分小とすると, 任意の $\theta \in \mathbb{R}$ に対し,
 $\omega_{\theta, r}$ で正則な (SCP) の解 $u(x, y)$ が一意的に存在し,

$$|u(x, y)| \leq \sum_{i=1,2} \exp \left\{ C |\varphi_i(x, y)|^{-\frac{(\theta-1-\delta')}{(\theta+1)}} \right\}$$

を満たす。

注意. $(x, y') \in \mathbb{C} \times \mathbb{C}^{n-1}$ を任意
 に選んで固定する。 $\theta \in \mathbb{R}$ を,

$$\theta = \arg(\varphi_1(x, y') - \varphi_2(x, y')) + \frac{\pi}{2}$$

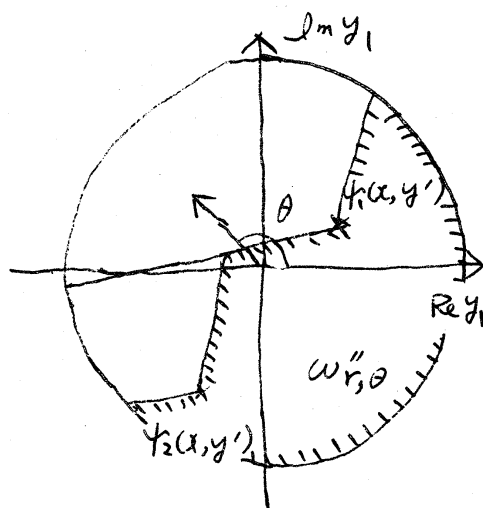
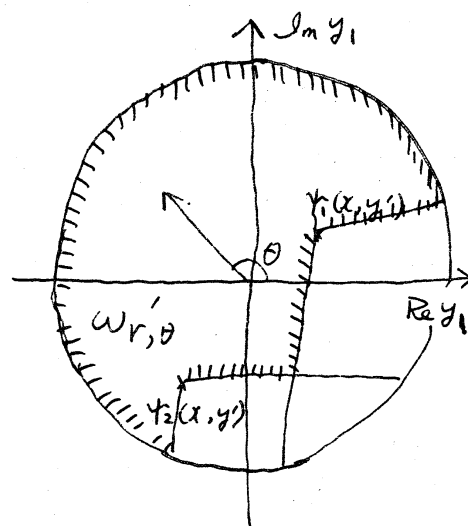
とすれば, 右図に見る通り,

$\omega_{r, \theta}$ は,

$$\begin{aligned} \omega_r = \{ (x, y) \in \mathbb{C} \times \mathbb{C}^n; \\ |x| < r, \\ |y_j| < r, \quad 1 \leq j \leq n, \\ y_1 \neq \varphi_1(x, y'), \quad 1 = 1, 2 \} \end{aligned}$$

の普通被覆の領域で, ω_r の全体を
 おおっている。従って, (SCP) の解

$u(x, y)$ の, ω_r におけるひとつの枝が完全に求められたこ
 とになる。 $\omega_{r, \theta}$ の任意の領域で 解を求めることができる



がどうか、今のところはわからない。

注意. より精密には次のことがわかる。 θ_0 を,

$$\theta_0 = -\arg\left([\lambda_2(x, y, \eta) - \lambda_1(x, y, \eta)]_{x=0, y=0, \eta=(1, 2, \dots, n)}\right)$$

とする。任意の $\theta \in \mathbb{R}$, $l \in \mathbb{Z}$ に対し, $V_{r, \theta, l}^z$, $z = 1, 2$, を,

$$V_{r, \theta, l}^z = \{(x, y) \in \mathbb{C} \times \mathbb{C}^n;$$

$$|x| < r, |y_j| < r, 1 \leq j \leq n,$$

$$|(l+1)(\arg x) - (\theta_0 + \pi l + \theta) - \frac{\pi}{2}| < \frac{3}{4}\pi,$$

$$|\arg(y_1 - \psi_2(x, y')) - \theta| < \frac{\pi}{2} + r\}$$

で定める。 $\omega_{r, \theta} = \bigcup_{l \in \mathbb{Z}} (V_{r, \theta, l}^1 \cap V_{r, \theta, l}^2)$ である。このとき, $V_{r, \theta, l}^z$ で正則な $u_{\theta, l}^z(x, y)$ が存在して,

$$|u_{\theta, l}^z(x, y)| \leq \exists C \exp\{\exists C |y_1 - \psi_2(x, y')|^{-\delta - \epsilon} (l+1)\}$$

を満たし, $V_{r, \theta, l}^1 \cap V_{r, \theta, l}^2$ で (SCP) の解 $u(x, y)$ は

$$u = u_{\theta, l}^1 + u_{\theta, l}^2$$

の形で与えられる。同様の分解が $\omega_{r, \theta}$ でもできる。すなわち, $u(x, y)$ は, y_1 を $\psi_1(x, y')$ で正則な函数と, y_1 を $\psi_2(x, y')$ で正則な函数の和の形で与えられ, その分解は, $\arg x$ 及び

$\arg(y_1 - y_2(x, y'))$, $i = 1, 2$, に依存する。特に, $\arg x$ に対する依存は, 常微分方程式論における Stokes 現象によるものである。